



大阪府立
あくとがわ
芥川高校

進学実績向上

生徒の視野を広げ 「行きたい大学」を 目指す指導を徹底

◎「高い人間力と明確な目標を持ち、
弛まぬ努力をする生徒を育てる学校」
を目指す。文系、理工系、看・農・
薬系に加え、2012年度にグローバル
専門コースを設置し、きめ細かい進路
指導を展開する。部活動も盛んで、
和太鼓部は14年に全国大会優勝。ヨ
ーロッパやアジア各国で公演を行う。

設立

1980(昭和55)年

形態

全日制/普通科/共学

生徒数

1学年約300人

2014年度入試合格実績(現浪計)

公立大は、京都市立芸術大に1人が合格。私立大は、京都産業大、同志社大、立命館大、龍谷大、追手門学院大、関西大、近畿大、摂南大、関西学院大、甲南大などに延べ275人が合格。短大12人、専門学校31人、就職4人。

住所

〒569-1027
大阪府高槻市浦堂1-12-1

電話

072-689-0109

Web Site

<http://www.osaka-c.ed.jp/akutagawa/>

変革のステップ

背景

◎潜在能力がある割には自己肯定感を持ちづらく、高い進路希望を見いだせない生徒が目立つ。大学進学は指定校推薦入試に頼る傾向が強かった

実践

◎生徒の視野を広げる進路指導、生徒と教師の1対1の対話を実践。進路と学年・部活動顧問の意識共有による組織力の向上を図る

成果

◎自分の行きたい大学を真剣に考える生徒が増え、進路実績も飛躍的に向上。下の学年に引き継がれる進路指導の取り組みを構築

指定校推薦入試の一覧に群がり 「行ける大学」を選ぶ生徒たち

大阪府立芥川高校の改革は、教師が覚えた違和感を契機に始まった。同校では7年前まで、指定校推薦入試で受験できる全ての大学名一覧を貼り出していた。当時、2学年担任だった一森直子先生は、多くの生徒がその一覧の中から自分が行きたい大学を探していたことに驚いた。「生徒は、学びたい学問や将来の夢よりも、『行ける大学はどこか』という相談をしてきました。年内に進学先を決めて早く楽になりたいという気持ちが強くなり、合格するとその後はほとんど勉強をしませんでした。安易な進路選択の結果、推薦で入学しながらも、大学を中退する卒業生すらいました」(一森先生)

2008年度、一森先生が3学年の進路指導担当になったのを機に、第1志望にこだわる進路指導へ大きく舵を切る。まず着手したのは、指定校推薦入試の校内選考の改革だ。3学年団と連携し、指定校推薦入試の募集が来た大学のうち進路希望調査で生徒が名前を挙げていた大学のみを公表した。更に、推薦を希望する生徒には、志望動機を確認するため、実際にその大学を訪問した報告書を書かせた。

そのような関門を設けたことで、指定校推薦入試の希望者は例年の3分の2ほどに減り、「志望大に行きたい気持ちが強まった」「違う大学

に行きたくなかった」と、自分の意志を明確化させる生徒が増えた。面談でも第1志望にこだわる指導を徹底した結果、産近甲龍（*1）の一般入試合格者が大幅に増えた。志望校への思いが高まり、学習意欲に結び付けばおのずと結果が出る。この改革は、学ぶ意欲と進学実績の相関を、多くの教師が実感する契機となった。



大阪府立芥川高校
教職歴28年。同校に赴任して10年目。進路指導主事。「教育は「人がより良く生きるため」のものである」



大阪府立芥川高校
教職歴32年。同校に赴任して6年目。進路指導部。「いつも公平に正直に。生徒にも嘘は言わず、分からないことは分からないと言う」



大阪府立芥川高校
教職歴30年。同校に赴任して5年目。進路指導部。「可能性を見つけて信じて励ます、懲りないサポーターでいたい」



大阪府立芥川高校
教職歴5年。同校に赴任して6年目。生徒指導部。「生徒が困難から逃げない姿勢を身に付ける指導をしていきたい」



大阪府立芥川高校
教職歴3年。同校に赴任して4年目。進路指導部。「理想」を掲げず、常に「1対1」で臨むこと」

教師が自ら情報収集に努め 自分の言葉で大学の魅力を語る

「『行ける大学』から『行きたい大学』へ」と指導方針を大きく転換したのが、10年度入学の31期生からだ。この年は市内の中学生数が増え、例年より2学級多い、1学年9学級となり、中・下位層の生徒の増加が予想された。この危機意識から、10年度の1学年団は、生徒が卒業後の進路を意識できるような幅広い情報を伝える指導を行った。学年団の1人だった、飯沼雅行先生は言う。

「生徒の9割が高槻市内から通い、他地域を知らない子がほとんどです。神戸市など通学圏内にある大学に対しても『遠い』と言いつつ、先輩が通っていないければ敬遠する状況でした。社会に対する生徒の視野を広げ、将来への展望を持ったチャレンジ精神を育てる必要がありました」

教師は入学時から絶えず「安易な進路選択はしない」「第1志望にこだわろう」と呼び掛け、自身の大学生活や浪人経験を語り、生徒が卒業後の姿を具体的に思い描けるように努めた。

生徒の視野を広げる上で重視したのは、データの活用だ。過年度の入試データを見せ、「大合格者の7割以上が一般入試で合格しており、指定校推薦入試の活用はむしろ例外的」「A大では後期入試でも3桁の合格者が出る。最後まで諦めるな」などと、生徒に入試の実情を伝

えて意識改革を促した。また、易きに流れてしまふような生徒には、ベネッセの進路マップのGTZ（*2）を見せ、行きたい大学に挑戦するよう励ました。更に、同校の最寄り駅の高槻駅からの通学時間、偏差値、取得可能な資格などを記した分野別大学一覧を作成し、知らない大学でも生徒が身近に感じられるように工夫した。

進路行事も見直した。その1つが、毎年、夏休みに行う「サマーチャレンジ」の改善だ。これは、大学進学希望者はオープンキャンパス、看護師志望者は看護体験、保育士志望者は保育実習というように、希望進路に応じた体験活動を行い、レポートにまとめるという取り組みだ。これまで、オープンキャンパスへの参加は生徒に任せていたが、近場の大学に行って済ませてしまふ者がいるなど、志望を育てて深める取り組みになっていなかった。そこで、31期生では、複数の大学に教師が引率する見学会を開いた。

また、3年生1学期には、京都産業大・近畿大・龍谷大などの大学別説明会を実施した。

「説明会では、私たちが大学のガイダンスに参加して得た情報を基に解説しました。大学に頼めば職員の方が来てくれますが、教師が得た知識を、自分の言葉で語ることで、より的確に大学の魅力を伝えられ、生徒の心が動くと考えました」（飯沼先生）

この説明会は生徒に好評で、前記3大学については、以後の学年にも取り組みが定着した。

*1 京都産業大、近畿大、甲南大、龍谷大のこと。

*2 ベネッセのテストにおける共通の評価指標。「S1」～「D3」までの15段階があり、進路マップではそのうちの「A1」～「D3」で評価される。

*プロフィールは2015年3月時点のものです

進路指導部が中心となり 取り組みを次学年に継承

3年生が1年生に体験談を話す講演会も、31期生が3年生になった時点で始めた。自習室によく来ていた4人の生徒に、1年生全員を前に体験を語ってもらったのが始まりだ。31期生の担任を務めた後藤大介先生はこう語る。

「生徒が『学校の勉強が一番大事』『意識次第で行事はもっと楽しめる』『先生と個別に話すと世界が変わる』など、特に打ち合わせをしたわけではないのに、私たちが最も伝えたいことを話してくれたのには驚きました。3年間の指導を通して、担任団の思いが伝わっていたことを知り、うれしかったです」
先輩のメッセージは1年生の心にも響いた。当時1学年担任だった有田祐輔先生は言う。
「『先輩の話を聞いてから行事を頑張るようになった』『進路について調べるように

図 3年間の進路指導の大きな流れ

1年生

職業ガイダンス（社会で活躍する卒業生による講義）、職業インタビュー

2年生

サマーチャレンジ（インターンシップ、ボランティア、保育実習、看護体験、オープンキャンパス参加など）、大学教授による模擬授業、進路別ガイダンス（受験学習プランニングなど）

3年生

学校別ガイダンス（入試説明会）、就職講座、進学面接指導、小論文講座、看護医療系統講座、など進路別の細かなガイダンスや面談

*学校資料を基に編集部で作成

なった」など、3年生の講演を機に意識が変わった生徒がいました。生徒が出来るだけの情報の触れられるように進路行事を行っています。必ず誰かには届いていると分かり、心強く感じました」

この講演も、3年生が2人ずつ、1年生の教室に行って語る形式にして、以降継続している。成功した取り組みを、進路指導部が中心となって次学年に伝えているところも、同校の躍進の要因となっている。

日常的なコミュニケーションを密にし 生徒の内面に迫る

このような効果的な行事を実施できているのは、教師が生徒と日々対話し、その内面を把握しているからだ。

「多くの生徒が、中学校時代の成績から『自分はこの程度』と決め付け、『努力をしても無駄だ』と思い込んでいます。1対1のコミュニケーションを通して、生徒を絶えず励まし、不安を受け止めることで自信を持たせることが大切だと考えています」（後藤先生）
授業中に励ますだけでなく、時間を見つけては、可能な限り生徒と話す機会を持つようになっている。自習室も、生徒と教師が絆を深める場の1つだ。31期生が2年生の時、冷暖房や間仕切りなどを整備したところ、利用率が向上。自

習室で学習していた生徒が、次第に、職員室へ質問に行ったり、教師に進路についての不安を打ち明けたりするようになっていった。

「私が最も伝えたいのは、『人はなぜ学ぶのか』ということ。基礎学力はもちろん大切ですが、それ以上に学習を通して困難なこと、嫌いなことから逃げない姿勢を身に付けてほしいと考えています。今後、多くの困難が待ち受ける人生に立ち向かうために、高校で大きな自信を得てほしいのです。この思いを日々伝え続けた結果、生徒は学習が自身の将来につながっているという実感を持って努力できるようになりました。卒業後もその姿勢を貫いてくれると期待しています」（後藤先生）
「元気をもらいに来た」と、教師に面談を申し込みに来る生徒も多い。「先生はいつも見守ってくれている」という安心感が、受験に向かう勇気を生徒に与えている。

意図や成果を丁寧に伝え 学年団・部活動顧問と合意を図る

新たな取り組みを行う上で、進路指導部と学年団、部活動顧問の合意がうまく図られていることも重要なポイントだ。特に、同校は部活動が盛んで、サッカー部は大阪府の公立高校の中では常に上位、和太鼓部は毎年海外で演奏を行っている。進路指導部の高階晶江先生は言う。

「学年全体で行う取り組みは、まず部員数の多い部活動の顧問に相談をし、日程をすり合わせます。部活動で活躍したいという思いを持って入学してくる生徒も多いので、部活動を続けながら志望を実現させる必要があると考えています。学校として、部活動の活性化と進路実績の向上は、どちらも実現すべき使命です。顧問の先生方もそれを理解しているので、協力関係が築けていると思います」

取り組みの意図をしっかりと伝えることも、連携を図る上で欠かせない。ある時、こんなことがあった。以前から続けている取り組みを進路指導部が学年団に依頼したところ、活動の意義がうまく伝わらず、実施に疑問を投げ掛けられ、危うく頓挫しかけたのだ。

「一方的にお願いしても、うまくいかないということを経験しました。その取り組みがどのような成果を上げてきたのかを伝え、重要性を認識してもらい、実施に至りました。協力関係を構築するには、取り組みの意図や成果を丁寧に説明し、納得してもらおう必要があることを改めて実感しました」（一森先生）

思考力・表現力の育成と自己肯定感の涵養が課題

ここ数年、同校の進学実績は大きく伸びた。31期生が卒業した12年度、産近甲龍の合格者は

約100人と前年度から倍増し、関西大や立命館大などへの現役合格者も出た。続く32期生からも、同志社大の現役合格者が出るなど、好調を維持した。

「13年度卒業生は、自習室の活用や部活動と学習との両立など、先輩から学ぶことが多かったと思います。先輩の活躍を見て、『自分にも出来る』という自信を持てたことが、大きく影響したのでしょうか」（高階先生）

受験勉強を3月まで頑張り、合格する生徒が多くなったことも、大きな変化だ。「卒業式が終わってからが勝負」という教師の言葉を信じて、最後まで諦めず希望進路を実現する生徒たち。指定校推薦入試に依存していた数年前には

考えられなかったことだ。

今後の課題は、表現力や論理的思考力の育成だ。AO入試の志望理由書に「まずく生徒がいることから、授業や行事を問わず、あらゆる場面で「書く指導」を徹底し、考えを人に伝える経験を積ませたい」という思いがある。

また、自己肯定感を高めることも課題だ。

「生徒に足りないのは、体験に裏打ちされた自信です。思考力や表現力の育成と共に、体験活動を充実させて、そこでの生徒の学びを前向きに評価していきたいと思っています。生徒が堂々と自分をアピールできるように、達成感を持たせる様々な取り組みを考案していく予定です」（飯沼先生）

情熱 若手教師が語る、指導変革への

学びは人生を豊かにすることを生徒に伝えたい

進路指導部 有田祐輔

初任で本校に赴任しました。学力が中堅の高校で、生徒指導上の課題も少ないためか、周りから「良い学校に赴任したね」と言われることもありました。ところが、実際に生徒と接すると、生徒は多くの課題を抱えており、指導すべきことはたくさんあると感じました。自己肯定感の乏しさ、視野の狭さ、基礎学力や論理的思考力の低さ、暗記中心の学習と安易な進路選択……。生徒の課題に気付いてからは、担任として、また進路指導部の一員として様々なことに挑戦しました。日々1対1の面談を繰り返し、生徒の内面に迫り、大学見学や展覧会鑑賞に引率して、視野を広げさせました。国語科担当としては、生徒に論理的思考力が身に付くよう、「なぜ、その答えになるのか」を考えるグループ活動も行いました。

私が生徒に何よりも伝えたいのは、「人生は楽しい」ということです。「君たちの目に映っているものと同じ景色を見ても、僕にはもっと違ったものが見える。花を見て季節を感じ、夜空を見上げて杯に月を映して酒を飲んだ古人のことを考える。学べば学ぶだけ世界は広がり、人生は豊かになる」と生徒に伝えています。

私が幸運だったのは、初任校で進路指導という重責を任せられ、周りの先生方と意見を自由に述べ合い、様々な企画を形に出来たことです。これからも、目の前の生徒に何が必要なのかを常に考えながら、新しい取り組みにチャレンジしていきたいと思っています。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2013年12月号指導変革の軌跡「沖縄県立読谷高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け